

公開講演会

(第2回国際北極研究シンポジウム)

北極の温暖化はどうなっているのか

日時：2010年12月6日(月) 午後6時～8時(開場5時)

会場：一橋記念講堂(学術総合センター) 東京都千代田区一ツ橋2-1-2

参加費無料。同時通訳付。先着順で400名まで。入口で身分証を提示ください。

主催：日本学術会議地球惑星科学委員会国際対応分科会(国際北極科学委員会小委員会)、国際北極研究シンポジウム組織委員会
共催：国立極地研究所、海洋研究開発機構、宇宙航空研究開発機構、国際北極圏研究センター

プログラム

大村 纂博士(スイス連邦工科大学チューリッヒ校名誉教授)

『北極の気候変動論争』

北極域の一部が寒冷化していることや前進している氷河があることから、北極の温暖化は起きていないという意見がある。これらの言及に対して最新の観測データに基づいて考察し、反証する。さらに、進行している気候変動の考えられる原因を示す。

ラリー ヒンズマン博士(国際北極圏研究センターディレクター、アラスカ大学教授)

『変動する北極域の水文学的システム』

北極の永久凍土帯における水文学(地上の水、雪、氷の性質等を研究する学問)の特徴と北極気候システムにおける水文学の役割について考察する。気候システムへの水文学的フィードバックは重要であり、それらのフィードバックがどのように変化するかを推論し、北極生態系における水文学的役割についても議論する。

デイビッド ヒック博士(国際北極科学委員会プレジデント、アルバータ大学教授)

『変動する北極環境の陸域生態系と観測網』

北極の陸域生態系は気温、雪氷、栄養の変化によって重大な影響を受ける。最近の国際極年(IPY)は短期間ではあったが北極に生活している人々や動植物への影響について詳細な新しい情報を提供しつつ、国際研究の機運を盛りだたせた。長期的な学際的、国際的監視によって、将来の気候温暖化による生態的な影響を予知し、緩和することが期待されている。



アクセス

東京メトロ半蔵門線、都営地下鉄新宿線・三田線「神保町」徒歩5分、
東西線「竹橋」徒歩5分

後援

北海道大学グローバルCOEプログラム「総合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」、筑波大学計算科学研究センター、
国際北極科学委員会(IASC)、気候と氷雪圏計画(CIIC/WCRP)

第2回国際北極研究シンポジウム事務局：国立極地研究所・海洋研究開発機構
問い合わせ先 電話 042-512-0645

<http://www-arctic.nipr.ac.jp/isar2pub>